

## 大覚寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査(6)

### 建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

本年度は1984・86・88年度の各調査区と重複して調査区を設定し、遣水遺構（SD43）の全容を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査面積は460m<sup>2</sup>、調査期間は1989年8月3日から9月1日までである。遺構は概ね4時期に大別できる。まずⅠ期は平安時代以前で、調査区内を西北から東南に向かって自然の濁流（SD95）によって押し流されてきた礫層が堆積する時期。Ⅱ期になると遣水SD43が開削される。平安時代初期～鎌倉時代に属し、3小時期に分けることができる。Ⅱ-1期は素掘りのSD43が名古曾瀧から大沢池へ向かって蛇行しながら流れ込む。この時期のSD43の堆積土からは、銅製の花瓶1点をはじめ、平安時代前期の緑釉陶器片などの多量の遺物が出土した。Ⅱ-2期には、SD43の東岸に盛土が行われ流路がせばめられると同時に、調査区北端付近のSD43流路中央部に石組枡（SX120）を設置する。枡以北のⅡ-1期のSD43堆積土（礫層）の湧水を一旦ためて浄化する機能を持つ。形状は一辺約1.4mの方形で、北・東・西の3面に径約30～40cmの自然石を2段積み上げる。南面の石積は攪乱土壌によって失われており、SD43堆積土との直接の関係は不明だが、他の3面より1段低い石積が存在し、枡の中の湧水がSD43へとオーバーフローしていたのであろう。内部の堆積土底部で「富寿神宝」1枚をはじめ平安初期～鎌倉時代の土器片が出土した。Ⅱ-3期には、SD43が埋まる途上で杭による護岸が行われる。さらにⅢ期は、SD43を完全に埋めて整地し、桁行8間・梁間3間の西廂付掘立柱建物南北棟（SB110）を建て、その西側にSD43堆積土中の湧水を利用した円形の石組井戸（SE112）を掘削する時期。SB110の柱掘形埋土からは15世紀の土器片が出土した。Ⅳ期はこの地域が水田化した時期。耕作のための暗渠排水（SD42、44）が、地形の傾斜に沿って西北から東南に向かって開削される。

Ⅱ-1期の遺構は、出土遺物が9世紀前半期に限られるため、嵯峨天皇の離宮、嵯峨院の時期のものである。Ⅱ-1期のSD43北半部の堆積土は、水が比較的速く流れたことを示す砂・礫や、一時期滞留してよどんでいたことを思わせる黒褐色粘土などであり、嵯峨院造営当初には名古曾瀧から流れ出す水流が豊富であったことを物語る。ところが、藤原公任の「滝の音はたえて久しくぬれど名杜流れて尚聞こえけれ」という有名な和歌が示すように、平安時代末期には滝の水が既に枯れており、西行法師の和歌からは滝石が閑院宮に運び去られて相当荒廃していたことがうかがえる。Ⅱ-2期の石組枡は、おそらくこの後に造営され、すでに埋まって流路としての機能を果たし得なくなったSD43の伏流水を、石組枡に一旦ためて浄化し、もとのSD43の南半部だけが遣水として利用されるようになる時期である。ただし、この改作を示す明確な記録はない。この後、14世紀前半に後宇多法皇が大覚寺を再興し、この地域に「中御所」を造営する。1984・86年度調査で検出した東西方向の築地堀（SA27）がその南限である。築地堀の北側には景石や礫を用いた遣水や小園池（SG32）が新たに造られ、築地堀より南側は、も

とのSD43の流路に沿って杭で護岸した流れが造られる。SD43が完全に埋められ整地された後に、8×3間の掘立柱建物南北棟が建つのが15世紀であるから、この建物の存続時期を大覚寺の伽藍が烏有に帰す応仁の乱（1468年）まで、とするのが妥当である。

以上のように本調査をもって遣水遺構のほぼ全体像が判明し、各時期の形態、構造、意匠などが明らかとなってきた。とりわけ、Ⅱ-1期の嵯峨院造営当初の遣水は、緩やかに蛇行して優美な形態をもってはいるものの、幅5～10mと規模が大きく、大沢池への注ぎ口に護岸や修景のための石材が一部遺存する以外は大半が素掘りであるなど、平安時代末期の毛越寺のように全面を石で化粧した遣水の姿とは大いに異っている。類例としては、1969・70年に検出した平城京左京一条三坊十五・十六坪における幅約1.2mの蛇行溝があり、今回のSD43を含めて奈良時代から平安時代初頭にかけての遣水遺構の一系譜をなすものと考えられる。　　　　　（本中 真）